

オスマン帝国とロシアの通商・航海条約（1783） について

——オスマン外交のヨーロッパ化の視点から——

尾 高 晋 己

はじめに

オスマン帝国がヨーロッパと締結した「条約」は、一般に *ahdname* アフドナーメとよばれている。それは休戦条約・講和条約に相当するものと、後に「カピチュレーション」と呼ばれるものから成っている。基本的に「カピチュレーション」は許与したスルタンの在位中に限り有効であり、ヨーロッパ側はスルタンがかわるごとに更新をする義務があった。またヨーロッパの商人は *dostluk ve sadakat üzere*（友好と誠意にしたがって）行動するのをやめたか、いつアフドナーメが無効になったかをスルタンが一方的に判断する権限を有していた⁽¹⁾。はやくはヴェネツィアのようなイタリアの都市国家に、やがて少し遅れて国民国家としてのフランス（1569）、イギリス（1580）、オランダ（1612）に許与された。18世紀に入り、1740年にフランスに対しては更新の不要な広大な特権を含むアフドナーメ（「カピチュレーション」）が与えられた⁽²⁾。これらアフドナーメ（「カピチュレーション」）は近代的な条約とは異なり「条項」という言葉で特権の内容を明示・区分することはなく、「条項」という言葉は一切使用されず、各種の特権が羅列されているだけである。だが、講和条約に相当するアフドナーメははやくから「条項」という言葉を冒頭において各種の内容が記載されている。たとえば露土関係の点からいえば、イスタンブル条約（1700年）⁽³⁾やベオグラード条約（1739年）⁽⁴⁾があげられる。

小論ではフランス・イギリス・オランダなどに許与されたアフドナーメ（「カピチュレーション」）と比較検討しながら、オスマン外交のヨーロッパ化の見地からオスマン帝国とロシアの通商・航海条約のもつ特徴の一端を明らかにしたい。

1 締結にいたる過程

オスマン帝国とロシアの通商・航海条約（1783）の研究はこれまでほとんど軽視されてきた。たとえば、ロシアとオスマン帝国の関係を扱った Kurat クラトの書物にも一言も言及されていない。最近ではキョセが、学位論文のなかでわずかにとりあげているに

すぎない⁽⁵⁾。したがって小論では彼の研究に依拠しながら締結にいたる過程を簡潔に言及していく。

本条約（アフドナーメ）については、1782年3月初めから約一年間断続的にイスタンブール駐在ロシア大使 Bulgakof (Bulgakov) ブルガコフ⁽⁶⁾とオスマン帝国の書記官長 Seyyid-Mehmet Hayri Efendi セイド＝メフメト＝ハイリ＝エフェンディ⁽⁷⁾、イスタンブールの法官 İstanbul kadısı Mufuzade Ahmed Resmi Efendi ムフザーデ＝アフメト＝レスミ＝エフェンディ、元大宰相代理 sabik Kethuda Hacı Mustafa Efendi ハジュ＝ムスタファ＝エフェンディとの間で交渉が開始された。

何回も開かれた会談でまず問題となったのは、ロシアの黒海付近から地中海地域へ穀物を輸出する自由である。ロシア側はキュチュク＝カイナルジャ条約のロシア側の批准書 (tasdikname) のなかで「穀物輸出の自由」は認められていることを述べるが、書記官長 reis efendi はオスマン語・ロシア語・イタリア語の条約文を尊重していることを主張して反論した。ロシア側の批准書は手元になく、その内容を理解することは困難である。三種類の条約文を比較検討した結果、ロシアの要求を正しいと断言することはむずかしい。

さらに後の交渉でロシア使節は地中海から黒海地域へ輸入するワイン hamr については、1回以上関税を徴収しないことを要求した。すなわち従来は3回徴税されたが、ロシア商人は今後購入したところで税を支払えば、さらに他のところで関税は徴収されない。書記官長は、この件を大宰相に伝えたところ、大宰相は将来問題とならないようにワイン税は百分の三となることを求めた。

その後の交渉においてロシアは、北アフリカの海賊からロシア商船が攻撃されないようにオスマン帝国が保証人となることを要請した。

オスマン側は、ロシア側が提案した条約草案のなかのいくつかの条項で「zarar-ı muaccel 現金で支払うことの損失」や「hatar-ı muaccel 現金で支払うことのリスク」となるために受諾を望まなかった。だが、ロシアが以前提出した通商条約案の調印を拒否しなかったことに関して、「mazarrat-ı eşedd addolunan 苛酷な損害とみなされる」若干の条項を修正すること、同意をみるのが困難な表現を調整することが決まった。ロシア側が提案した81カ条のうち75カ条は受諾できるが、残りの6カ条はオスマン政府によって調整され、女帝エカテリーナに伝えられ、ついに1783年6月22日に調印された。

2 条約文の形式的特徴

(ア) 条項

全81カ条の冒頭には必ず条項 (madde) という言葉がおかれている。この種のアフドナーメにおいては、従来条項にあたる言葉はおかれず、ヨーロッパの国々に与えられる諸特権が羅列されているだけである。たとえば1612年および1680年におけるオランダ

へのアフドナーメのオスマン語史料については、やはり条項という言葉が使用されていない⁽⁸⁾。さらに1740年のフランスへのアフドナーメに関するオスマン語史料についても、条項という言葉が使用されていない⁽⁹⁾。しかしフランス語訳されたものについては、条項にあたる言葉がおかれている。たとえば1569年および1740年のフランスへのアフドナーメである⁽¹⁰⁾。だが、スウェーデン（1737年）、シチリア（1740年）、プロイセン（1762年）、スペイン（1782年）、サルディニア（1823年）、アメリカ（1830年）、ベルギー（1838年）、ポルトガル（1843年）のアフドナーメについては条項という言葉がおかれている。1680年のオランダへのアフドナーメには条項という言葉はない。18世紀中葉から形式上の変化が生じたと推察されないだろうか⁽¹¹⁾。

この1783年のアフドナーメにおいては、18世紀中葉に見られる変化に従って、条項という言葉が使用されたことはきわめて近代的な形式をとっているといえよう⁽¹²⁾。

(イ) 前文

Düvel-i Ecnebiye Defterleri（「諸外国台帳」）、83/1, pp. 176-189によれば64行ある。Cevdet や *Mecmua-ı Muahedat*（『諸条約集』）には前文がなく比較できない。1612年のオランダへのアフドナーメの場合にはオスマン語史料では16行で、英語訳が約2.5頁である。1569年のフランスへのアフドナーメについては、オスマン語史料を入手できなかったが、フランス語訳の刊本資料では約1頁である。前二者のアフドナーメが交付された時点と、1783年を比較すればオスマン領が縮小していたことは間違いのない事実である。1612年のアフドナーメのなかでオスマン帝国の領土として列挙されている多くの地域が、1783年のアフドナーメの中では見られない。つまりカルロヴィッツ条約（1699年）やパッサロヴィッツ条約（1718年）によりオスマン帝国は、とりわけオーストリアに広大な領土を喪失した。反対にわずかではあるが、1612年のアフドナーメに見られない地域が、1783年のアフドナーメのなかに見られるケースもある。1569年のフランスへのアフドナーメや1612年のオランダへのアフドナーメの場合と単純に比較はできないが、1783年のアフドナーメのオスマン語史料は、分量的に前二者と比較して少ないどころかやや多いように推察される。

この前文（および結び）において、İnalçık イナルジクの指摘するように、本条約アフドナーメは、キュチュク＝カイナルジャ条約を補完するものであることが言及されている。たとえば、「Rusya devletiyle Devlet-i aliyye beyninde mukaddema Kaynarca'da munakid ahdnamenin on birinci maddesinde meşru cümle uhudun bil-tagayyür ve dikkat ile meri' tuttuğu」（ロシアとオスマン帝国との間で以前、カイナルジャで締結された条約（アフドナーメ）（キュチュク＝カイナルジャ条約のこと）の第11条において合法的なすべての約束を変更することなく注意を払って遵守されることを）、さらにこのアフドナーメでは英仏の商人なみにロシアの商人を処遇するための措置がとられている。「zıkr olunan on birinci maddenin muktezasınca gerek ahir(?) ticaret ve gerek Rusya tüccarının

hakkında işbu madde lafız-be-lafız tahrir olunduğu gibi her dürlü ihtiyaç zuhurunda França ve İngilterelü'nün ve sair milelin şürtları meri ü muteber tutulub düvel-i mezkure tüccarının mütemetti oldukları menafi ve serbestiyat ve muafat ve müsâlimat ile Rusya tüccarı dahi temettü üzere muahede-i münferide mezkurenin tanzimi lazım gelmekle。」(既述の第11条の必要とするところに従ってロシア通商及びロシア商人に関してこの条項が逐語的に書かれているようにあらゆる種類の必要が明白となった場合に、フランスやイギリスなど他の国々の人々(商人)に与えられている諸条件が有効とされて、既述の諸国家の商人が享受している利益・自由・免税・平和によってロシア商人もまた恩恵を得るために既述の別個の条約(muahede)が調整されねばならない)⁽¹³⁾

Düvel-i Ecnebiye Defterleri, 83/1に収録されている条約文は、muahede-i ticaret tasdiknamesi という形式をとっている。このことは第一にムアヘデ muahede という「双務的な条約」の意味をもつ言葉が使用されていること、第二に収録されている条約文は批准書(tasdikname)であることから重要な意味をもつと考えられる。

3 条約文の内容上の特徴

(ア) 双務的内容

以下の条項に双務的内容が見られる。たとえば第2条、第3条、第4条、第5条、第6条、第7条、第8条、第9条、第10条、第11条、第12条、第14条、第15条、第16条である。

16世紀初頭オスマン帝国とヴェネツィアとの間にかわされたアフドナーメにおいてすでに、たとえば第4条(しけにあい船舶が座礁した場合の対応)第5条(船舶が漂流した場合の対応)第8条(負債は債務者から要求される)第11条(両国の船舶がであった際の対応)は認められていた。

しかし1783年のアフドナーメにおいては、たとえば第2条、第3条はオスマン・ロシア両帝国の商人が相手国に赴き自由に通商できることを規定している。従来見られなかった双務的な内容である。

第2条

「canibeynden karar verildiğe tarafeyn reayası gemileriyle ve sefineleriyle veyahud araba ve sair nakıl ahmal için münasib olan merakibe tarafeyn limanlarına ve mevaki şehirlerine her vaktide duhul ve icrayı ticaret ve ittihaz mesakin edebilecekler. Ve gerek Devlet-i aliyye'nin ve gerek Rusya devletinin gemicileri ve yolcuları ve gemileri velev taifesinde ecnebi milletden bir kaç nefer bulunur ise dahi dostane kabul olunub gemicileri ve yolcuları ve bir dürlü bahane ile hüsn iradeetlerine muğayir tarafeynden cebren istihdam olunmıyalar. Lakin bu cümle ile canibeynin reayaları kendü padişahlarının hademeteine müstahdim olmak lazım oldukları takdirde müstesna olalar. Eğer itbadan veyahud melahlardan biri bulunduğu hizmetden yahud gemiden firar eder ise

ve temeküne taleb olduğu vilayetde ağıleb olan mezhebi yani memalik-i islamiyyede din-i islami kabul ve Rusya memalikinde tanassur etmez ise derhal red oluna. Kezalik dahi tarafeyen reayası zikr olunan mahallerde şemen hakikiyi bad‘del’eda her ne kendülerine lazım olur ise iştirasına ve gemilerini ve sefinelerini ve arabalarını tamir ve kalafat etmekle maişetler için ve yollar için lazım olan zahayiri mübayaa etmelerine ve mahal-ı mezkurede bir dürlü muhalefet ve tazyik olunmıyarak rey müstakilleriyle ikamet ve azimet etmeke müstakil olalar. Lakin buldukları mahallerde işbu muahede-i ticarete başkaca tanzim olunmamış keyfiyatın vukunda devleteyn memalikin nizamı ve kavaidene bilatereddüd muvafakkiyet eyliyeler」(両者のレアーヤーは船舶あるいは馬車や他の貨物を輸送するために適切な船舶によって、両者の港湾や都市にいつでも入り、商いを行い、居住できる。オスマン帝国およびロシアの船員と旅人や船員の中に外国人が数名いれば友好的に扱われるべし。両者は船員や旅人をよき統治に反して強制的に雇用すべきではない。だが両者のレアーヤーは自身のパーディシャー(君主のこと)の僕として雇用されねばならない場合には例外となるべし。たとえもし部下あるいは melah (水兵)の誰かが任務もしくは、船舶から逃亡し、定住を望む地域において支配的(有力)となっている信仰、すなわちイスラムの諸国土(memalik-i islamiyyede)においてはイスラムを受け入れ、ロシアの諸国土(Rusya memalikinde)においてはキリスト教をうけいれなければ直ちに追放されるべし。同様に両者のレアーヤーは既述の地域で正当な価格を支払った後、彼ら自身にどのようなものが必要であれ、それらを購入することに、船舶や馬車を修理するために、道中必要となる穀物を購入することに、既述の地域で決して強制されず独立した(自由な)判断で滞在すること、また出発することは自由であるべし。だが彼らが居る地域で本通商条約(muahede-i ticaret)が、さらに調整(tanzim)されない事態が生じた場合に両国の諸国土の法(devleteyn memalikin nizamı ve kavaide)に躊躇しないで従うべきである。)⁽¹⁴⁾

第3条

「tüccar taifesi ali il itlak bilcümle Rusya reayası Rusya memalikinde yedlerine verilen mürur kağıt ile Devlet-i aliyye'nin memalikinde geşt ü gúzar edebileler. Ve eğer bundan başka Rusya elçisi veyahud konsolosunun biri mesfurlar için veyahud hasta mesfurların birisi için Devlet-i Osmaniyye'nin mürur kağıdlarını taleb eder ise bu maslahataa mensub kalmalar tarafından bilatehir ita olunalar. Ve Rusya reayasına ziyade bir nefi olmak için her biri kendü diyarında giydiği elbise ile gitmeke mezun olub memalik-i Devlet-i aliyyede bilamuhalefeten musalihlerini tervic eyliyeler ve kezalik kendülerinden haraç tesmiye olunan vergü ve ahir bir gune teklif metalibe olunmıya. Ve maayetlerinde bulunan emtialarını işbu ahdname muktezasınca karar verilen rüsum gümrüklerin eda eyledikten sonra valiler ve kaziler ve sair zabitler bilamuhalefeten mürur u uburlarına cevaz vereler. Devlet-i aliyye reayasının dahi Rusya memalikinde bu gune emniyetler için kendülerine umur-ı ticaretler için ve yollar için lazım olan mürur kağıdları ve

şehadetnameler ita olunub şöyleki Devlet-i aliyyenin tüccar ve reayası maiyetinde olan emtialarını tarifeler mucibuince tahsis olunan rüsumu eda eyledikde bilamuhalefeten istedikleri mahallarada rahi olalar」(すべてのロシアのレアーヤーはロシアの諸国土 (Rusya memalikinde) において手渡された通行証 (mürur kağıt) を持参してオスマン帝国の諸国土 (Devlet-i aliyye'nin memalikinde) を往来すべし。もしさらにロシア使節や領事の誰かが既述の人のためにあるいは病人のためにオスマン帝国の通行証 (mürur kağıt) を要求すれば、関係部局からただちに交付されるべし。ロシアのレアーヤーは、優遇された地位におかれ、各人 (her biri) は自身の郷里において身につけている衣服を着用してオスマン帝国へ行くことが許可され、オスマン帝国の諸国土 (memaliki Devlet-i aliyye'de) において妨害されることなく平穩を受諾させられること。また彼ら自身からハラジと呼ばれる税 (vergü) や他の種類の税 (teklif) を要求されるべきでない。持参している商品を本条約の必要とするところにしたがって決定された関税 (rüsüm gümrük) を支払ったあと、ヴァーリ (知事) やカーディ (裁判官) や他の役人は妨害することなく往来が許されるべし。オスマン帝国のレアーヤーもまたロシアの諸国土 (Rusya memalikinde) においてこの種の安全のために彼ら自身に通商や道中に必要な通行証 (mürur kağıdları) や証明書 (şehadetname) が交付されるべし。すなわちオスマン帝国 (Devlet-i aliyye) の商人やレアーヤーは持参する商品を関税表 (tarifeler) にしたがって定められた関税を支払うことに際してなら妨害をうけることなく、彼らが望むところを旅行できる。)⁽¹⁵⁾

(1) 最恵国待遇 (most favoured nation)

オスマン語史料には「最恵国待遇」そのものを示す固有な単語は存在しない。

「最恵国待遇」の条項はレヴァント貿易の激しい競争の結果、16世紀末にはイギリスのアフドナーメに現れた。すなわち「Venediklü ve Françalı ve sair dostluk üzere kırallara verilen ahdname-i hümayunumuzda mestur ve mukayyed olan hususular İngilterelü'nün hakkında dahi mukarrer olub ser-i kavime hümayunumuzda muhalif kimesne mani ve müzahim olmya。」⁽¹⁶⁾ (ヴェネツィア人やフランス人や他の友好的な関係にある王たちに与えられた我がスルタンのアフドナーメのなかで書き留められている事柄は、イギリス人に関しても確認され、我がスルタンの人民の聖なる法にさまざまな人が妨害を加えるべきではない。)

Naff ナフによれば、17世紀、18世紀に東地中海の通商をめぐるヨーロッパの争いの結果、通商上の特権を含むこの種のアフドナーメをオスマン帝国との間で結ぶ国家の数が増加——少なくとも6ヵ国——ただだけでなく、この種のあらゆるアフドナーメに「最恵国」の条項が見られるようになったことを指摘している⁽¹⁷⁾。

1783年のアフドナーメにおいては、最恵国待遇に関する条項はたとえば第17条、第20条、第29条、第52条、第77条、第80条に見られる。

たとえば第17条

「França ve İngiltere taifelerinin cümleden ziyade haklarına müsaade oluna geldiğine binaen bunlar misillü bilmüsavat Rusya taifesi dahi Devlet-i aliyye memalikinde itibar olunmak vacib olmağla Devlet-i aliyye gerek zikr olunan ve gerek sair müstemim malik haklarına icra olunan cümle müsalmat ve riayeti(?) Rusya reayaları hakkına dahi icra ve riayet eylesmesini işbu madde ile müteahhid olur. Kezalik bilmukabele Rusya memleketinde Rusya devletinin indinde ziyade dost ve müsaade olunan malik mütemetti oldukları müsalmat Devlet-i aliyye reayası hakkına dahi riayet oluna」⁽¹⁸⁾（フランス人やイギリス人の商人のすべてより多くの権限が与えられた結果、彼らと同じようにロシア商人もオスマン帝国の諸国土（Devlet-i aliyye'nin memalikinde）において尊重されねばならない。したがってオスマン帝国（Devlet-i aliyye）は既述のおよび他の外国人の権利のために遂行されているすべての平穩・尊敬をロシア人にも本条項で約束する。また見返りにロシアの国土（Rusya memleketi）においてロシア国家は友好を認められている諸国民が享受している平穩をオスマン帝国（Devlet-i aliyye）のレーアヤーにも尊重する。）

第20条

「Devlet-i aliyye musalaha ahnamesinin on birinci maddesiyle ve muahedesinin altıncı maddesiyle kendü memalikinde Rusya reayasının icra eyledikleri ticaretlerine França ve İngiltere misili dost ve haklarına ziyade müsaade olunan tavaifin mütemetti oldukları menafi tahsis etmek ve mesfurlardan zikr olunan iki taifenin verdikleri rüsmatdan gayri resmi mutalebe eylememek üzere müteahhid olduğuna binaen işbu madde şu vechle mukavele olındığına Rusya reayaları Devlet-i aliyye memalikinde emtia ve eşya götürdüklerinde ve Devlet-i aliyye'nin memalikinden emtia ve eşya alub Rusya memleketine götürdüklerinde zikr olunan França ve İngiltere taifelerinin verdikleri rüsumatın aynını eda edüb yani yüzde üç ve malum olaki Rusya tüccar sefaini bir defa rüsum gümrükü eda eyledikten sonra bir dahi Devlet-i aliyye'nin taht hükümetinde olan ahir bir mahallinde edasına mecbur olmyalar. Ve Rusya reayasının zikr olunan iki taifeden verilen rüsumatın aynını olmak üzere verecekleri rüsum ziyade tasdik için Rusyaluya bilahasr ve men ola ila ahire mikyas olacak taifeteyn merkumetiyyetinin Devlet-i aliyye ile olan ahdamelerinin mevadatulzikri bu mahalde derc olunur. Zira França ahnamesinde França tüccarı memalik-i Devlet-i aliyye'ye götürdükleri ve alub götürdükleri emtiadan kadimden bu ana değin yüzde beş verüb lakin Devlet-i aliyye'nin kadimi dostlarından olmağla yüzde üç gümrük vermek üzere müceddeden ahdamelerine ilhak olunmak istida etmeleriyle ricaları hayz kabule vaki olub vech şürü üzere kendülerinden yüdze üçden ziyade taleb olunmya. Ve gümrüklerini eda eylediklerinde memalik-i Devlet-i aliyye cari olan nukud ile hazine-i amireye alındığı minval üzere alunub noksan ve ziyade talebiyle rencide olunmyalar deyu mestur olub ve kezalik İngiltere ahnamesinde dahi Halep ve Mısır ve sair memalik-i Osmaniyye'nin beldelerinde bulunan İngiltere tüccarı ve İngiltere bayrağı altında gelenler bilatehlike alışveriş

idüb kemafissabık emtialarının kıymetlerine nazaran ancak yüzde üç hesabı üzere gümrükünü verüb ziyade bir akçe vermiyeler deyu muharredir ve kezalik Rusya memalike emtia götürecek Devlet-i aliyye reayası Rusya'da ilan olunan tarifelere mutabakat ile Rusya devletinden ziyade müsaade olunan dost tavaifin verdikleri rüsumatın aynını vereler」(オスマン帝国は (Devlet-i aliyye) 講和条約 (musalaha ahnamesi) の第11条と条約 (muahedesi) の第6条により自身の諸国土 (kendi memaliki) におけるロシアのレアーヤーが行う通商に、英仏と同様に友好と諸権利がさらに許可されている (ziyade müsaade olunan) 商人が享受する利益を割りあたえること、既述の両国の商人が支払う税だけでそれ以外の税は要求しないことを約束した。したがって本条項はこのような同意をみた結果、(ロシア商人は) オスマン帝国の諸国土 (Devlet-i aliyye memaliki) に商品などを輸出する際に、またオスマン帝国の諸国土 (Devlet-i aliyye memaliki) から商品などをロシアの国土 (Rusya memleketi) に輸入する場合に既述の英仏の商人が支払う税と同額を支払う。つまり3パーセントの税を。ロシア商船は1回関税を支払った後、オスマン帝国 (Devlet-i aliyye) の支配下にある他の地域において支払いを強制されないことを知るべし。ロシアのレアーヤーが既述の二国の商人 (英仏のことか?) が支払う税と同額となるように支払う税をさらに認めるためにロシア人を厚遇すべし。最後まで基準となる (İla ahire mikyas olacak) 既述の両者がオスマン帝国 (Devlet-i aliyye) との間で結んだアフドナーメの諸条項がこの場所に挿入されるべし。というのはフランスのアフドナーメにおいてフランス商人はオスマン帝国の諸国土 (Devlet-i aliyye memaliki) へ (商品) を輸出し、また反対に輸入した商品に関して昔から今日まで百分の五 (の関税) を支払ったが、しかしオスマン帝国 (Devlet-i aliyye) とは古くからの友好国であるので百分の三の関税とするように最近アフドナーメのなかに加えられることを要求した。その要求はこのまじいと受諾されたので、百分の三以上の関税を要求すべきではない。関税を支払う際に、オスマン帝国の諸国土 (memaliki-i Devlet-i aliyye) において流通している現金で国庫 (hazine-i amire) に徴収され、不足や過剰を要求して苦しめないようにと書かれている。またイギリスのアフドナーメにおいてもアレppoとエジプトや他のオスマン帝国の諸国土 (memaliki-i Osmaniyye) にいるイギリス商人とイギリス国旗を掲揚して危険なく交易を行い、過去にあったように価格に従って百分の三の割合で関税を支払い、それ以上は1アクチェすら支払わないことが書かれている。またロシアの諸国土 (Rusya memaliki) に商品を輸出するオスマン帝国 (Devlet-i aliyye) のレアーヤーはロシアにおいて公表されている関税表に従ってロシア国家からさらなる許可が与えられている (ziyade müsaade olunan) 友好国の商人が支払う関税と同額のを支払うべし。)⁽¹⁹⁾

むすび

1783年のロシアの通商条約 (アフドナーメ) は、その形式および内容の点からキュ

チュク = カイナルジャ条約締結から対仏露土防衛同盟条約調印（1799年）——ヨーロッパの勢力均衡システムにオスマン帝国が参入した——にいたる時期におけるオスマン外交のヨーロッパ化の一步を示す外交文書であったと言える。

注

- (1) İnalçık, *İmtiyazat*, *EF*², p. 1179.
- (2) *Mecmua-ı Muahedat*, vol. 1, pp. 14–35. Testa, vol. 1, pp. 186–210. G. E. Noradounghian, *Recueil d'actes internationaux de l'empire ottoman*, Nendeln/Liechtenstein, 1897, 1978², vol. 1, pp. 277–300.
- (3) オスマン語史料については *Düvel-i Ecnebiye Defterleri*, 83/1, pp. 4–9. *Mecmua-ı Muahedat*, vol. 3, pp. 209–219.
- (4) オスマン語史料については *Düvel-i Ecnebiye Defterleri*, 83/1, pp. 82–86. *Mecmua-ı Muahedat*, vol. 3, pp. 244–251.
- (5) Köse, O., *1774 Küçük Kaynarca Andlaşması*, Doktora Tezi, Ondokuz Mayıs Üniversitesi, Samsun, Turkey, 1977, pp. 183–187.
- (6) 在任期間は、1781–1787年である。Spuler, B., *Die Europäische Diplomatie in Konstantinopel bis zum Frieden von Belgrad (1739)*, *Jahrbücher für Geschichte Ost-Europas*, I (1936), p. 440. F. R. Unat, *Osmanlı Sefirleri ve Sefaretnameleri*, Ankara, 1968, p. 248.
- (7) 任期は1781年11月18日～1783年10月17日である。İ. H. Danişmend, *İzahlı Osmanlı Tarihi Kronojisi*, vol. 5, 1971, İstanbul, p. 348.
- (8) A. H. de Groot, *The Ottoman Empire and the Dutch Republic*, Leiden/Istanbul, 1978, pp. 236–246. *Mecmua-ı Muahedat*, vol. 2, pp. 95–107.
- (9) *Mecmua-ı Muahedat*, vol. 1, pp. 14–35.
- (10) Noradounghian, pp. 90–93, 280–300.
- (11) *Mecmua-ı Muahedat*, vol. 1, pp. 146–157, pp. 83–90, pp. 212–223, pp. 108–115, pp. 180–189, pp. 298–309. vol. 2, pp. 55–60, pp. 2–6, pp. 95–107.
- (12) オスマン語史料については *Düvel-i Ecnebiye Defterleri*, 83/1, pp. 176–189. *Cevdet*, vol. 2, pp. 369–391. *Mecmua-ı Muahedat*, vol. 3, pp. 285–319.
- (13) İnalçık, *İmtiyazat*, *EF*², p. 1186. *Düvel-i Ecnebiye Defterleri*, 83/1, pp. 175–176. Noradounghian, vol. 1, p. 351.
- (14) *Düvel-i Ecnebiye Defterleri*, 83/1, p. 176. *Cevdet*, vol. 2, pp. 369–370. *Mecmua-ı Muahedat*, vol. 3, pp. 285–286.
- (15) *Düvel-i Ecnebiye Defterleri*, 83/1, pp. 176–177. *Cevdet*, vol. 2, p. 370. *Mecmua-ı Muahedat*, vol. 3, pp. 286–287.
- (16) S. A. Skilliter, *William Harborne and the Trade with Turkey 1578–1582*, 1977, Oxford, p. 235.
- (17) *Studies in Eighteenth Century Islamic History* edited by T. Naff and R. Owen, 1977, Southern Illinois University Press, p. 100. N. Soussa, *The Capitulatory Regime of Turkey*, 1933, The Johns Hopkins Press, pp. 53–59, pp. 60–63, pp. 64–67.
- (18) *Düvel-i Ecnebiye Defterleri*, 83/1, p. 180. *Cevdet*, vol. 2, p. 375. *Mecmua-ı Muahedat*, vol. 3, p. 294.
- (19) *Düvel-i Ecnebiye Defterleri*, 83/1, pp. 180–181. *Cevdet*, vol. 2, p. 375. *Mecmua-ı Muahedat*, vol. 3, pp. 296–297.

